

2023年8月20日

「主の憐れみ」

ヤコブの手紙一 2:8-13

竹島 敏牧師

ヤコブの名によるこの手紙が書かれた目的は、「信仰のみ」ということを強調したパウロの「義の教え」が誤解され、「行い」が軽視される状況にあった当時の信仰のあり方を、ただすためであったと言われていました。ここで重要なのは、「行い」の規範である十戒をすべて守ることが、私たちにできるのか、という痛みをもって、「憐れみは裁きに打ち勝つ」と言っていることです。主イエスもパウロも尊んだ「隣人愛の戒め」を、最も尊い律法であると、この著者もいっているのです。そして、裁き合うより憐れみをかけあう、互いの痛みを我がこととして受け止めあう、そのことに目を向けるよう、勧めています。この「憐れみ」とは何でしょうか。

主イエスは、神でありながら、私たちと同じ位置にまで降りてきてくださって、この私たちと同じ痛みを、はらわたが千切れるような想いで共に痛み、共に身に受けるために傍らに寄り添ってくださった、それが福音書の語る「主の憐れみ」です。私たちは、聖書を「繰り返し読む」ことによって、主イエスを知り、そして聖書の記述を心に留めつつ「繰り返し黙想する」ことによって、今、この私に、どのように主が関わろうとされているのかを、たずね求めることができます。そしてさらに、「繰り返し祈る」ことによって、主イエスと出会うことができるのです。このキリスト者としての基本的な営みを深めていくことによって、私たちは主イエスとの深い出会いを経験するのです。そして主の憐れみを受けて、その憐れみを隣人と分かち合う方向へと導かれてゆくのです。そのようにしてまさに、「憐れみが裁きに打ち勝つ」状況が、すなわち主の平和が実現してゆくのです。主の憐れみに押し出されて、愛をもって人と関わり、互いの命を生きあう生き方を、模索してゆくことができますように。